様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３０１０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０７３３

研究課題名（和文）小学校教師の外国語教師としての変化のプロセス：認知の特徴と環境要因

研究課題名（英文）Environmental factors and characteristics of Japanese elementary school English teachers: Building a better elementary school English education curriculum

研究代表者
中村　香恵子（Nakamura, Kaeko）

北海道科学大学・工学部・教授

研究者番号：４０３４７７５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、英語教育に取り組んでいる小学校教師の外国語教師としての特徴を環境要因との関わりにおいて明らかにすることである。そのために、教育環境に特色のある小学校の教師を対象にして、教師の認知面、感情面、行動面について混合研究法を用いて解明した。その結果、指導経験や環境要因が教師の内面に与える変化の一端が明らかになり、得られた示唆をもとに、望ましい教師への支援や新しい英語教育の可能性について検討した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to investigate the characteristics of Japanese primary school language teachers engaged in English education in relation to their teaching environments. A mixed research method was utilized to target teachers in different distinctive educational contexts, with a focus on cognitive, affective and behavioral dimensions. The study revealed one aspect of how teaching experience and workplace contexts affects teacher attitude. These findings were used to review effective teacher support and the potential for a new English educational curriculum.

研究分野：教師認知研究

キーワード：小学校英語教育　教師認知　環境要因

１．研究開始当初の背景

小学校への英語教育導入により，期せずして新たに外国語教師としての役割を担った小学校教師たちに引き起こされる内面の変化とはどのようなものなのか。そしてそうした変化は教師をとりまく環境の違いによってどのように異なった特徴をもつのであろうか。こうした疑問に答えることは，小学校で外国語指導に携わる教師たちを適切に支援するための貴重な情報源となるものであると考える。

最新の言語教師認知研究を総括した Borg (2012)によれば，教師認知研究はその範囲や内容において近年めざましく広がりと深まりをみせている。しかしながら日本の小学校英語教育は始まったばかりであり，日本における小学校教師を対象とした言語教師認知研究はまだ十分とは言えない。これまでの教師認知研究では，「教師の思考過程」「教師知識」「ビリーフ」などといった個々の教員の内面に焦点を当てた研究が多く見られているものの，環境との関わりを探った研究は多くはなく，その多くは教師の思考や信条のレベルにとどまっており，動機づけなどといった，より深いレベルにまでは立ち入っていない。

小学校教師は自らが学習者として小学校における英語教育を体験しておらず，基本的に教員養成課程での教科専門教育を受けていない特殊なケースであると言える。彼らが言語教師として何によってどのように成長していくのを知ることは，教師教育や小学校英語教育の改善のための貴重な情報源になるだけでなく，学習者要因の分野においても新たな示唆をもたらすものと考える。

２．研究の目的

本研究の目的は，外国語指導に取り組んでいる小学校教師の実態をその内面から理解することにより，個々の教師のニーズに応じた適切な支援や教師教育の改善に資することである。研究課題を「小学校教師たちに共通する言語教師としての特徴は何か」,「異なった環境にある小学校教師たちに共通する言語教師としての特徴は何か」,「異なった環境にある個々の小学校教師の言語教師としての特徴は何か」に設定し，全体像としての教師をとらえるために，認知・感情・行動の３領域に着目する。そのうえで，生態学枠組み (Bronfenbrenner, 1979)を用い，個人をとりまく環境をマイクロシステム(個人が直接経験している環境)，メゾシステム(個人が参加する２つ以上の行動場面の相互作用), エクソシステム(積極的な参加者ではないが影響がある環境)，マクロシステム(文化全体のレベルで存在する一貫性や信念体系)の４つの階層から考察する。

３．研究の方法

本研究では，質問紙を用いた量的なデータと調査目的にあったサンプリングによるインタビューや集団討議から得た質的データを混合して用い，統計的な検証と記述データの考察を繰り返し行うことにより，研究課題の解決をはかる。

質問紙調査の分析には，時間的，経済的な制約から基本的に横断的研究方法を用い，経験の違いなどといった属性によって教師を群化し，その群間の違いを統計的な手法で比較する。また，質的なデータはコード化とそのカテゴリー間の関係を解釈することで理論の構築を図る。こうした質的なデータから得られる情報は，教師認知のもつ複雑性，文脈性を理解するのに役立ち，教師の成長のプロセスを動的にとらえることを可能にするものであると考える。

こうした複数の手法を組み合わせることにより，小学校教師の言語教師認知に関してより包括的で深い理解を得ることができ，また一般的で大多数に共有された教師認知と個人レベルの認知を区別し，個人と集団との両面に焦点を当てることができるものと考える。

４．研究成果

(1) 小学校教師に共通する特徴は何か

・<u>研究方法</u>

調査にあたっては，中村・志村(2011)で作成された質問紙を用い，教師の認知面（指導観・言語学習者ビリーフ），感情面（外国語学習動機・国際的志向性），行動面（外国語授業実践・教師の学び）に関して教師をとりまく環境要因との関わりにおいて分析した。職場環境要因として職場効力感・教師の協力体制を調べた。また属性として，年齢，性別，担当学年・役職，教師経験年数，英語指導経験，自己申告による英語力を分析の対象とした。

・<u>調査対象者</u>

インターネット調査と郵送法により 279 名の小学校教師のデータを得た。

・<u>分析の方法</u>

質問項目から得たデータにおける各変数の特徴を明らかにし，変数間の関係を調べることで課題の解決を図った。分析には尺度ごとに因子分析を行い，内的整合性を高めたうえで，それによって得られた因子得点を用いた。

属性によって教師を群化し，群間の因子得点を比較するとともに，環境要因（学校環境と社会・文化的背景）の違いによる得点の比較により要因間の関係を検討した。

・<u>結果</u>

学習方略に関わる学習者としてのビリーフは環境による影響を受けにくいものの，学習動機や国際的志向性といった感情面は性差や英語力といった個人的要因によって違

いがあり，中でも学習動機は指導経験，役割といったマイクロシステム(Bronfenbrenner）の影響を受けて変化しやすいことが示唆された。また，外国語活動授業実践は指導観よりも学習者としてのビリーフに基づいたものになっている可能性が見られた。また，職場環境要因としては，有能性の高い環境が認知面，感情面に，関係性の高い環境が行動面に関係していることが示唆された。一方，文化・社会的背景において教師間に違いは見られず，本研究が対象としている教師たちは英語教育という領域においては同一の文化・社会的文脈にいるものと判断された。

(2)異なった環境にある小学校教師たちに共通する言語教師としての特徴は何か

・研究方法

ここではBronfenbrennerの枠組みにおけるエクソシステム（地域環境）に注目し，地域的な要因がもたらす学校環境と小学校教師の言語教師としての特徴の関係を，質問紙調査から得た量的データを質的研究法によって得た言語データによって補完することによって検証した。

・調査対象者

地域環境的に特徴のある 2 校を抽出し，各校で英語の授業を担当している教師たちへの質問紙調査とともに，各校から抽出した 3 名の教師たちに対するインタビューとグループ討議を実施した。抽出された2校は，英語授業実践において教師へのサポート体制や英語教育実施年数に異なった特徴をもっている。

・分析方法

上述の研究で得た質問紙によるデータの中から，対象となる２校のデータを抽出し，因子得点の比較によって2校の教師間に見られる類似点や相違点を調べた。また調査で得られたすべてのデータも比較データとして用いることにより，小学校教師全体との比較によって両校の特徴を明確にした。

さらに，量的データの結果を補完するため，各校から抽出した３名ずつの教師に対するインタビューとグループ討議を行った。分析は動機づけに関する３つの前提条件（Deci & Ryan，1985）による教師の自律性，関係性，有能性を考慮して行われた。

・結果

教師に対するサポートがなく担任が単独で授業をしている環境（自律性の高い環境）や長年の英語教育の実践によって共有すべき学校としての経験知をもちそれを共有しようとする働きかけが教師の協力体制（関係性）を高めているのではないかということが示唆された。また，そうした自律性と関係性が高い環境にいる教師たちに効力感(有能感）が高い傾向があることが示され，自律性の高い環境が教師の関係性と有能感を高めていることが推察された。一方教師に対するサポートのある学校 の教師には，教師の協力体制の認識に関して多様性が見られ，サポートへの依存度によって異なった認識が生じている可能性が示された。

また，結果からは自律性のある環境（教師が単独で授業をしている環境）と関係性の高い環境（教師間で経験や知識を共有しようとする環境）によって教師の指導観が共有化されたものになるのではないかということが推察された。さらにそこには，長年の英語教育の実践によって培った学校としての経験知を共有しようとする働きかけも作用していることが示唆された。

感情面に関しては，英語を指導するという経験が教師の内発的動機づけを高めるという推論が裏付けられた。また特に自律的な授業実践が教師の外発的動機づけを高めるのではないかということが示唆された。一方「国際的志向性」に関しては，異文化の人々と実際に交流する体験が児童だけでなく教師の志向性も高めている可能性があり，そこには学校の国際的な交流の取り組みや，地域環境における国際性の高さも関わっている可能性が示唆された。

一方，授業実践に関しては，実践へのサポートやカリキュラム，学習の成果に対する期待等が構造化授業実践（詳細な計画に基づく授業実践）の傾向をもたらしている可能性が示され，行政からのサポートに恵まれ，教育の成果を期待されているという地域要因に起因する学校環境の特性が教師の実践を定式化したものにするのではないかということが示唆された。

(3)異なった環境にある個々の小学校教師の特徴は何か

・調査方法

インタビューとグループ討議による質的調査を実施し，得られた結果を質問紙調査による量的データと混合して用いることによって分析した。質的データの分析には SCAT 法（大谷，2011）を，結果の提示には Joint Display（Creswell，2015）を用いた。

・調査対象者

上述の（２）で協力を得た６名の教師に加えて，より環境要因の違いを明確にするために，地理的に孤立した環境にある僻地校の教師も調査の対象とした。

・結果

① 自律性のある環境と教師の協力体制の高まりに，また教師の協力体制（関係性）の高さと教師の自己効力感や学校効力感の高まりに関係があるといった環境要因間の関係性が示唆された。

② 英語指導実践に対する意欲は教師の英語

習得に対する自信といった個人内の要因ではなく，生徒と教師間の良好な関係や教師の協力的な関係性といった環境要因が関わっている。さらに，子供たちに見られた望ましい変化の実体験や，英語指導が自分の強みになるという認識や期待されていることに対する良い意味でのプレッシャーといった外的な要因も教師の実践への意欲づけとなっている。
③ 学習者として獲得した学習者ビリーフや学習経験が教師となってからも保持され，授業実践に影響している。一方，教職専門教育によって得た知識が学習法などのビリーフに影響をしている。
④ 児童に活動をさせることの多い英語授業を実践することが教師の指導観を「生徒主体の指導観」へ変化させる可能性があるものの，指導観の変化には単なる情報の交換ではなく，教師同士の深い協働が必要である。
⑤ 授業におけるサポート体制は教師のサポートに対する依存度の高さによって異なった作用をするという推論が教師の具体的な言葉から裏付けられ，カリキュラムやテキストへの依存の程度が，授業実践を「知識の伝達を重視し，問題の解決法を（学習者に考えさせるのではなく）提示する」といった詳細な計画に基づいたものにしているという推論が支持された。
⑥ 小学校外国語活動においては，構造化実践や生徒主体実践と言った従来の授業実践の枠にはまらない，独自の実践が構築されている可能性が示された。
⑦ 地域の国際性の高さ，教師の研究会等の機会の多さやアクセスの便利さといった地域環境要因が教師の国際的志向性や教師の専門性を高めるための学びの高まりや頻度に関わっている可能性が示された。
⑧ 関係性の高い学校の教師の発話量とその内容から教師間の関係性の高さが教師の気づきや内省力を高め，教師の成長に関わる要因である可能性が示された。

(4)本研究から得られた示唆
　こうした結果をもとに，以下に本研究から得られた示唆を教師への支援と新しい英語教育の可能性の観点から述べる。

① 教師への支援に関する示唆
・学校環境の構築
　本研究においては教師と教師をとりまく環境要因との関わりを探索してきた。その中で教師の内面や実践には学校環境要因の関わりが大きいことが示唆された。本研究からは，自律性のある環境が教師の協力体制の高まりに，教師の協力体制（関係性）の高さと自己効力感や学校効力感の高まりに関係があるという要因間の階層的な関係の可能性が示唆された。そこから得られる示唆は，教師に働きかけることでその背後にある環境要因にも変化を及ぼすような教師への支援が可能であるということである。教師の関係性や有能感を高めることは外部からの力では難しいが，教師の自律性を高めながらサポートを構築することは可能であると考える。
　外国語教育の専門家ではない小学校教師たちが外国語活動を実践するにあたっては，マニュアルや人的サポートによる支援は熟達化の準備状況をつくるために必要なものである。しかし，その際その支援の在り方によって教師の自律的実践の度合いが変わってくる。つまり，一律の指導のノウハウを身に着けることを重視するのではなく，個々の教師が自分のクラスの子供たちに合わせた創意工夫ができるような支援，また学校内の教師同士で実践の交流が必要になるような支援の工夫である。そこには教師が自分で自分の子供たちの実態やニーズに応じて授業を組み立てられるような柔軟なカリキュラムや必要に応じたサポート人材，そして教材や活動を交流・共有できる同僚の存在が求められる。
小学校外国語活動は 2020 年をめどに教科化されることが検討されている。そこで懸念されることはカリキュラムの柔軟性が失われるのではないかということである。これまで小学校外国語活動は「子どもの心に種をまく」ような実践を行ってきた。これまでの小学校外国語活動の成果は，個々の教師たちの創造力，適応力，柔軟性のある実践によるものが大きい。これからの小学校英語教育の方向性に，これまで小学校教師たちが培ってきた英語教育の成果を生かすような発想を求めたい。

・教師の実践に対する意欲を高めるもの
　小学校英語教育の成功の鍵となるのは，教師の実践に対する意欲である。本研究における質的研究からは教師が異なった外国語指導実践への意欲づけとなる要因をもっていることが示された。例えば教師 A は「子どもたちの関係性に望ましい変化が見られたこと（自尊関係志向)」，教師 B は「子どもの理解や反応に変化がみられたこと（授業力向上志向)」，教師 C は「子どもたちが英語に関心をもつようになったこと（言語興味志向)」がその実践を意欲づけている要因であることが読み取られた。これらの教師たちに共通しているのは「子どもたちに見られた望ましい変化の実体験」であった。小学校教師たちは，教科内容の指導だけではなく，児童の生活や人間的な成長に対しても責任をもっている。教師が英語指導実践によって自分のクラスの子供たちに望ましい変化が生じたことを実感できたとき，英語教育実践が彼らの小学校教師としての教育実践のための歯車の一つとして大きな役割を果たすこととなるだろ

・ビリーフの可視化
　教師のビリーフは，無意識に教育実践に影

響を及ぼしているとされ，教師教育にビリーフ研究を取り入れることの必要性は多くの研究者によって主張されている。しかし，具体的にそれをどのように取り入れるのかということに関しては十分に検討されていない。人の内面を探るための質的調査で問題になることは，インタビューや質問からは本人が無意識にもっている信念や感情までを引き出すことは難しいということにある。本研究においては，直接的な質問ではなく，グループ内で共通に語りあった発言の中から構成概念を抽出した。そうしたグループ討議においては，教師たちが互いの言葉に触発されながら，自己の内省を深めていく姿が見られていた。グループ討議に関して，本研究の参加者である教師たちからは「いろいろなことを考え，気づくためのとてもいい機会になった」という言葉があった。ビリーフ研究は，教師本人が自覚することによってはじめて授業改善に活かされる。本研究で用いたグループ討議は人の内面を引き出すための有効な手段の一つであると考える。

② 新しい英語教育の可能性

本研究からは，学習者に活動をさせることの多い外国語活動を指導するという経験が，教師の指導観を「生徒主体の指導観」に変化させることが示され，英語教育の導入が小学校における構成主義的教育観を強化・促進する可能性が示唆された。つまり小学校英語教育が小学校教師たちの指導観に変化をもたらし，それによって小学校教育全体が変容する可能性があると考えることができる。そしてまた，小学校で培われた英語教育が我が国における英語教育全般に変化を及ぼす可能性に期待することもできる。本研究からは，小学校の英語教育において，外国語の知識やスキルのない子供たちを相手に生徒主体の授業実践を構築することを目指した従来の授業実践の枠にはまらない，独自の実践が構築されている可能性があることが示された。他の教育実践における経験が外国語活動の授業においても生かされることが期待できる。小学校での学びは，全体として実に豊かな内容を学んでいる。小学校教育で培われてきた実践知から我々が学べることは多いと考える。

＜参考文献＞

Borg, S. (2012). Current approaches to language teacher cognition research: A methodological analysis. In Barnard, R. & Burns, A. (Eds.). Researching language teacher cognition and practice: International case studies (Vol.27). Bristol: Multilingual Matters,11-29.

Bronfenbrenner, U. (1979). The ecology of human development: Experiments by nature and design. Cambridge: Harvard University Press.

Creswell, J. W. (2014). A concise introduction to mixed methods research. Thousand Oaks: Sage Publications.

Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985). The general causality orientations scale: Self-determination in personality. Journal of Research in Personality, 19(2), 109-134.

大谷尚 (2011).「SCAT: Steps for coding and Theorization―明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』10(3),155-160.

中村香恵子・志村昭暢 (2011).「小学校教師における言語教師としての認知研究―小学校英語活動に意欲的な教師の経験と学びから」『JACET 教師認知研究会研究集録』1, 58-72.

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）

萬谷隆一・志村昭暢・中村香恵子 外国語活動の成果に対する中学校英語教師の意識ー必修化直後と現在における意識の比較，小学校英語教育学会 JES journal 17, 69-84, 2017.査読あり.

Kaeko Nakamura・Akinobu Shimura・Makoto Mitsugi, Language teacher cognition and environmental factors: Primary school teachers in different working contexts, ARELE The Japan Society of English Language Education 28, 129-144, 2017. 査読あり.

Kaeko Nakamura・Akinobu Shimura, The Effects of Environmental Factors on Japanese Primary School Teachers as Language Learners, ARELE The Japan Society of English Language Education 26, 301-316, 2015. 査読あり.

中村香恵子・志村昭暢，小学校外国語活動授業実践の特徴とその影響要因の探索，小学校英語教育学会 JES Journal 14, 179-194, 2014. 査読あり.

〔学会発表〕（計　21　件）

打矢昭啓・八木啓太・今泉はるか・中村香恵子 教科化に向けた学習内容と評価:寿都町の取り組み，英語教育セミナー，2018.

中村香恵子，SCAT を用いた混合研究法による教師認知研究の試み，日本コミュニケーション学会北海道支部大会，2017.

Kaeko Nakamura, Workplace context as it relates to language teacher role among Japanese primary school teachers and within a framework composed of three basic psychological needs, British Association for Applied Linguistics (BAAL) 2017 Conference (UK),133, 2017.

中村香恵子・志村昭暢，小学校教師の教育環境と英語指導に関する質的研究，第 43 回全国英語教育学会(JASELE)島根大会，62-63，2017.

中村香恵子・萬谷隆一・志村昭暢，到達目標を明確にした実践と教師の意識の変化，第 17 回小学校英語教育学会(JES) 兵庫大会， 109，2017.

Kaeko Nakamura, What motivates teachers to learn as a professional language teacher: The effects of three basic psychological needs, JACET 55th International Convention, 2016.

中村香恵子，混合研究法による教師認知の研究の試みーJoint Display の活用，第 42 回全国英語教育学会埼玉大会，2016.

中村香恵子・志村昭暢，学校環境要因と言語教師としての教師の特徴，第 16 回小学校英語教育学会宮城大会，2016.

萬谷隆一・志村昭暢・中村香恵子，必修化後における小学校外国語活動の成果に対する中学校英語教師の意識の変化，第 16 回小学校英語教育学会宮城大会，2016.

中村香恵子，新しい英語教育の展望-教師の視点で小学校英語と中学校英語をつなぐ，札幌市教育研究推進事業「全市研究集会」，2016.

Kaeko Nakamura・Satoshi Hasegawa, Japanese primary school teachers as language learners: studying living context, working context and language teacher cognition, JACET 54th International convention, 2015.

中村香恵子・志村昭暢,ミックス法による言語教師認知研究：小学校教師の認知と環境要因， 第 15 回小学校英語教育学会 JES 広島大会，2015.

中村香恵子・三ツ木真実・志村昭暢，異なる環境における小学校教師としての特徴：半構造化面接と集団討議を通して，第 41 回全国英語教育学会 JASELE 熊本大会，2015.

中村香恵子・笹島茂・河合靖・志村昭暢， 言語教師認知研究と英語教育，大学英語教育学会 JACET 北海道支部大会，2015.

河合靖・佐野愛子・中村香恵子・三ツ木真実，ＰＡＣ分析を利用した英語教師役割観ビリーフの可視化，第１回 CACET，HELES，CAJ 合同研究会，2015.

中村香恵子，小学校教師の言語教師認知研究，JACET 言語教師認知研究会第８回懇談会， 2015.

Kaeko Nakamura, Teacher development among Japanese elementary school teachers in terms of foreign language learning, British Association for Applied Linguistics (BAAL) 2014 Conference (UK), 2014.

Kaeko Nakamura・Satoshi Hasegawa, The effect of educational environmental factors on pedagogical beliefs and English teaching practices among Japanese elementary school teachers, JACET 53rd International Convention, 2014.

中村香恵子・長谷川聡・志村昭暢，成人外国語学習者と社会的要因の関係：時間要因と環境要因の影響 第,40 回全国英語教育学会徳島大会，2014.

中村香恵子・志村昭暢，小学校教師の言語教師としてのライフコース研究：マクロシステムの視点から，第 14 回小学校英語教育学会（ＪＥＳ）徳島大会，2014.

〔図書〕（計 1 件）

笹島茂・西野孝子・江原美明・長嶺寿宣（編著）小嶋英夫・中田賀之・浅岡千利世・栗原ゆか・中村香恵子・志村昭暢・伏野久美子，言語教師認知の動向，開拓社，ISBN978-4-7589-2197-8,158-163,2014.

〔その他〕

中村香恵子，教師の変容と環境要因―小学校教師の言語教師認知研究，博士論文(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院)， 2016.

６．研究組織

(1)研究代表者

中村 香恵子 （NAKAMURA, Kaeko）
北海道科学大学，工学部，教授
研究者番号：40347753

(2)研究分担者

萬谷 隆一 （YOROZUYA, Ryuichi）
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号： 20158546

石塚 博規 （ISHIZUKA, Hiroki）
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：50364279

中村 典生 （NAKAMURA, Norio）
長崎大学・教育学部・教授
研究者番号：70285758

秋山 敏晴 （AKIYAMA, Toshiharu）
北海道科学大学・高等教育支援センター・教授
研究者番号：80275479

志村 昭暢 （SHIMURA, Akinobu）
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60735405